

「足関節捻挫予防プログラムの科学的基礎」 によせて

SPTSシリーズ第3巻「足関節捻挫予防プログラムの科学的基礎」完成おめでとうございます。足関節捻挫はスポーツ外傷で最も頻度の高い外傷でありながら、膝前十字靭帯や肩関節脱臼に比べて注目度が低く、その治療法や予防法はどちらかといえば足踏み状態の領域でした。しかし最近になり足関節捻挫に対してもMRIや関節鏡の発達により、病態に新しくメスが入りつつあります。このような時期に、蒲田先生がいち早くSPTSシリーズに取り上げてくれたことに感謝の意を表します。

本シリーズでは第1章にバイオメカニクスを、第2章に捻挫の実態を、そして第3章に捻挫後遺症を配置しています。第1章のバイオメカニクスでは、近年は足関節の前距腓靭帯や踵腓靭帯の機能のほかに距骨の動きが注目されております。今回は紹介がありませんでしたが、X線透視装置とCTスキャンを用いて3D-2D registrationなども行われつつあり、今後は足部のよりダイナミックな動きも解析できるようになることを期待しております。第2章の足関節捻挫の疫学では、構成諸靭帯の受傷頻度やスポーツ種目別頻度のほかに、受傷メカニズム、病態と予後についての記載があります。従来から損傷靭帯と不安定性との関係はよくいわれておりますが、神経筋反応時間の遅延や合併する軟骨損傷などは新しい知見であり、読者が今後さらに勉強していくポイントかと思われれます。第3章の捻挫後遺症は、最も注目すべき章です。特にFreemanらが提唱した構造的不安定性（mechanical instability : MI）と機能的不安定性（functional instability : FI）の概念は、いま広く受け入れられつつあります。MIのチェックは従来の方法でできますが、FIのチェックには固有感覚や姿勢制御全体をみるテクニックが必要であり、今後、そのための確実な診断法や治療法などの科学的な手法を確立していく必要があります。

足部・足関節はシューズ・装具・テーピングが大きく関係する部位です。特にスポーツシューズの近年の進歩にはめざましいものがあります。しかし、ややもすると売らんがための商業主義に流れ、医科学的により選手の足を守るシューズが販売されているという保証はありません。われわれはこのようなことにも目を向ける必要があります。また日常使われている装具やテーピングの有用性とその限界を再度検証し、正しい場面で正しく装具やテーピングが使用されるように指導していく必要があります。

最後に忙しい業務を割いてご編集、ご執筆いただいた皆様に深謝いたします。

2009年12月

早稲田大学スポーツ科学学術院 教授 福林 徹

スポーツ理学療法セミナーシリーズ

第3巻発刊によせて

SPTSはその名の通り“Sports Physical Therapy”を深く勉強することを目的とし、2004年12月から企画が開始された勉強会です。横浜市スポーツ医科学センターのスタッフが事務局を担当し、2005年3月の第1回SPTSから現在までに5回のセミナーが開催されました。これまでSPTSの運営にご協力くださいました関係各位に心より御礼申し上げます。

本書は2007年3月に開催された第3回SPTS「足関節捻挫予防プログラムの科学的基礎」を集約した内容となっています。文献検索は、発表準備時期である2007年1月前後であり、その後本書の原稿執筆準備が行われた2008年前半に追加検索が行われました。したがって、2008年初頭までの文献レビューが本書に記載されています。このレビューは、足関節捻挫の予防およびリハビリテーションについての研究を開始する方、論文執筆中の方、研究結果から臨床的なアイデアの裏づけを得たい方、そしてこれからスポーツ理学療法の専門家として歩みだそうとする学生や新人理学療法士など、多数の方々のお役に立つものと考えております。本書が幅広い目的で、多くの方々にご活用いただけることを願っています。

SPTSは何のためにあるのか？ SPTSのような個人的な勉強会において、出発点を見失うことは存在意義そのものを見失うことにつながります。それを防ぐためにも、敢えて出発点にこだわりたいと思います。その質問への私なりの短い回答は「Sports Physical Therapyを実践する治療者に、専門分野のグローバルスタンダードを理解するための勉強の場を提供する」ということになるでしょうか。これを誤解がないように少し詳しく述べると次のようになります。

日本国内にも優れた研究や臨床は多数存在しますし、SPTSはそれを否定するものではありません。しかし、“井の中の蛙”にならないためには世界の研究者や臨床家と専門分野の知識や歴史観を共有する必要があります。残念なことに“グローバルスタンダード”という言葉は、地域や国家あるいは民族の独自性を否定するものと理解される場合があります。もしも誰かが1つの価値観を世界に押し付けている場合には、その価値観や情報に対して警戒心を抱かざるを得ません。一方、世界が求めるスタンダードな知識（または価値）を世界中の仲間たちとつくり上げようとするプロセスでは、最新情報を共有することによって誰もが貢献することができます。SPTSは、日本にいながら世界から集められた知識に手を伸ばし、そこから偏りなく情報を収集し、その歴史や現状を正しく理解し、世界の同業者と同じ知識を共有することを目的としています。

世界の医科学の動向を把握するにはインターネット上での文献検索が最も有効かつ効果的です。また

情報を世界に発信するためには、世界中の研究者がアクセスできる情報を基盤とした議論を展開しなければなりません。そのためには、Medlineなどの国際論文を対象とした検索エンジンを用いた文献検索を行います。MedlineがアメリカのNIHから提供される以上、そこには地理的・言語的な偏りが既に存在しますが、これが知識のバイアスとならないよう読者であるわれわれ自身に配慮が必要となります。

では、SPTSは誰のためにあるのか？ その回答は、「Sports Physical Therapyの恩恵を受けるすべての患者様（スポーツ選手、スポーツ愛好者など）」であることは明白です。したがって、SPTSへの対象（参加者）はこれらの患者様の治療にかかわるすべての治療者ということになります。このため、SPTSは、資格や専門領域の制限を設けず、科学を基盤としてスポーツ理学療法最新の知識を積極的に得たいという意思のある方すべてを対象としております。その際、職種の枠を超えた知識の共通化を果たすうえで、職種別の職域や技術にとらわれず、“サイエンス”を1つの共通語と位置づけたコミュニケーションが必要となります。

最後に、“今後SPTSは何をすべきか”について考えたいと思います。当面、年1回のセミナー開催を基本とし、できる限り自発的な意思を尊重してセミナーの内容や発表者を決めていく形で続けていけたらと考えております。また、スポーツ理学療法に関するアイデアや臨床例を通じて、すぐに臨床に役立つ知識や技術を共有する場として、「クリニカルスポーツ理学療法（CSPT）」を開催しております。そして、SPTSの本質的な目標として、外傷やその後遺症に苦しむアスリートの再生が、全国的にシステマティックに進められるような情報交換のシステムづくりを進めて参りたいと考えています。今後、SPTSに関する情報はウェブサイト（<http://SPTS.ortho-pt.com>）にて公開いたします。本書を手にした皆様にも積極的にご閲覧・ご参加いただけることを強く願っております。

末尾になりますが、SPTSの参加者、発表者、座長そして本書の執筆者および編者の方々、事務局を担当していただきました横浜市スポーツ医科学センタースタッフに深く感謝の意を表します。

2009年12月

広島国際大学保健医療学部理学療法学科 蒲田 和芳